

海外研究発表会の参加報告

経営学科・米山茂美ゼミナール



2016年12月3日、経済学部・米山ゼミナールの学生19名が、台湾・元智大学を訪問し、研究成果の発表会と交流イベントに参加しました。

元智大学（Yuan Ze University）は、台湾・桃園市にキャンパスを構える私立大学です。工学部、情報学部、管理学部などから成る総合大学で、1989年に創立されて以来、世界的にも学力が高いとされる台湾の中でトップレベルの研究・教育水準を誇っています。今回、元智大学・管理学部の黄敏萍（Minping Huang）教授をはじめ、林珮岑（Claudia Y.Y. Lin）准教授、黄文暉（Wenyeh Huang）准教授、徐樂文（Wally Hsu）客員准教授、尤淨纓（Chingying Yu）客員准教授など5名の教授陣と黄教授のゼミナール学生18名が参加してくれました。

午前の研究発表会では、「ソーシャル・イノベーション」（社会的問題解決のためのイノベーション）という統一テーマの下、両大学から2チームずつが交互に英語で研究発表を行いました。元智大学の学生の研究テーマは「フードロス（食品廃棄問題）」と「台湾における教育の再生」の2つ、学習院大学からは同じく「フードロス」と「単身高齢者の外出・消費を促進する新事業」の2つを発表しました。

元智大学の発表は、聴講側の学生を壇上に呼んでテーマに関する意見を求めたり、グループワークの時間を設けるなど、聞き手に当事者意識を持たせること、発表を通して新たな意見や発想が生まれるようにすることなどの工夫が随所に見られました。一方、学習院大学は両チームとも経営戦略のフレームワーク、特にCSV（creating shared value、共通価値の創造）の概念を使って、日本の社会問題へアプローチした点が特徴的でした。社会的問題を解決すると同時に経済的利益も追及することで持続的なソーシャル・イノベーションを実現するという発想が、元智大学の学生の関心を集めました。英語での発表や質疑応答には苦労しましたが、言いたいことをし

っかりと伝え、何とかコミュニケーションを取ることができました。

学生による研究発表の終了後に、米山教授の他、元智大学の5名の教授陣から講評をいただきました。そこでは、日本と台湾の学生の研究に対するアプローチの違いについての指摘が相次ぎました。元智大学の学生は研究過程で発想や思考のプロセスを大切にしているのに対し、学習院大学の学生は仮説を検証するためのデータの活用や、客観的な論理展開を重視しています。教授陣からは、互いの良いところを取り入れてよりよい研究を目指してほしい、というアドバイスをいただきました。

研究発表会の終了後には大学構内で懇親会（ランチ・パーティ）が行われました。元智大学の学生が台湾料理を振る舞ってくれたほか、学習院大学からは「折り紙」を紹介。両国の文化に触れる良い機会となりました。その後も、エクスカーションとして、元智大学の学生が観光名所である「大溪老街」を案内してくれました。大溪老街は桃園にある歴史ある建物が集中するエリアです。清朝時代や日本統治時代に造られた街並みは国内外の観光客で大変賑わっており、台湾の歴史や文化を伝えるとともにどこか懐かしさも感じられます。元智大学の学生は、英語のほか日本語も交えて学習院大学の学生を案内してくれました。さらに、それぞれの建物の詳細のほか、日本の文化や流行についても調べてくれており、道中の話題も尽きることがありませんでした。

また、現地で出会った台湾の方々にはみなさんが私たち日本の学生を温かく向か入れてくれました。訪日外国人の増加や2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を前に、「日本のおもてなしの精神」が盛んにいわれていますが、私たちは台湾の人々のホスピタリティに学ぶべきことが多くあると感じます。



今回の台湾・元智大学との学術交流を通して、研究に対する姿勢や台湾の文化、国際交流におけるホスピタリティの重要性を学びました。また、異国の友人ができたことも、多くの学生にとって世界とのつながりを強く感じるきっかけとなりました。そして、何よりも、国際的な共通言語としての英語の力を高めることの大切さを痛感しました。今後も学習院大学と元智大学の学生間の交流が続き、両国の価値観や文化の相互理解、友好関係がさらに発展してほしいと思います。

(学習院大学経済学部米山ゼミナール3年 伊勢谷 光平)